

さなげかいゆうてつきちようけいへい
猿投灰釉手付長頸瓶

<概要>

| | |
|-----|--|
| 員 数 | 1 口 |
| 法 量 | 高さ 25.5cm、口径 9.6cm、胴径 18.5cm、底径 11.1cm |
| 時 代 | 平安時代（8 世紀末） |

猿投窯¹産の灰釉手付長頸瓶²で、底部に焼き割れがあり、口縁部³に僅かな欠損が認められるが、ほぼ完形品である。高台²は、内外側とも直立し断面形は方形を呈する。胴部はほぼ球形で、頸部はやや細く口縁部にかけて緩やかに外反し、口縁部は縁帯状になる。肩の一方に環状の把手が付けられている。ロクロ成形で、胴部と頸部の接合は、肩の部分が別に成形された「三段構成」である。胴部は回転ヘラ削り調整され、頸部内外面にはロクロ目（回転ナデ痕）が残る。

口縁部内面から肩部にかけて、やや光沢のある暗緑色の灰釉³がみられるが、刷毛塗りの痕跡がないことから自然釉（降下釉）で、本器はいわゆる「原始灰釉」の範疇に含まれる。長石混じりの素地土が用いられ、焼成は良好で、器肌は暗褐色を呈する。これらの型式学的特徴から猿投窯編年の O-10 号窯式、すなわち 8 世紀末から 9 世紀初頭に位置付けられる。

なお本器は、重要文化財（工芸）に指定された「猿投灰釉多口瓶」⁴が出土した黒笹³⁶号窯跡において、昭和 30 年頃に「猿投灰釉多口瓶」と同じ人物により発掘されたとされており、その後、愛知県陶磁美術館に寄贈されたものである。

本器は、平安時代初期における猿投窯の技術力の高さを示す優品で、工芸品としての価値は極めて高い。また、「猿投灰釉多口瓶」と同一窯跡より出土したとされていることから資料的価値も高い。

1 猿投窯：名古屋市東部から豊田市西部、瀬戸市南部から大府市および刈谷市北部の約 20 km 四方に集中する 1000 基を越す古窯跡の総称

2 高台：底にある基台

3 灰釉：草木の灰類を媒溶剤とした釉



猿投灰釉手付長頸瓶（愛知県提供）